

オーストリアのクリエイティブシーン

メード・イン・オーストリア」 - クリエイティブ産業シーンで成功を収める鍵
流行とデザイン (デザイン/建築/絵画)

今も昔も、オーストリアはその豊かな文化で世界中から文化国家として高い評価を受けています。創造性にかけては膨大な潜在能力を有するのが、この国です。ゆえに、オーストリアのクリエイティブ産業が付加価値や雇用の創出において、経済全体の成長率を上回っていても不思議はありません。10万人が従事し、年間180億ユーロ近くを稼ぎ出すクリエイティブ産業は、建築から、コンテンツとマルチメディア、デザイン、ファッション、映画、芸術や音楽に至るまで多岐にわたっています。クリエイティブ産業はこの数字で、化学、機械製作、エネルギー供給などの伝統産業を越えてしまいました。クリエイティブ産業部門の多様性は、オーストリアの国民経済にも大きな意味をもたらしています。イノベーションの牽引役としての機能とあわせて、「国のブランド化」にも大きく貢献しています。オーストリアのクリエイティブ経済は、世界の主要市場で経済立地オーストリアのイメージを向上させています。そのおかげで、具体的なビジネスチャンスも開かれ、オーストリア経済全体に価値ある刺激を与えています。

ファッション・モード

民族衣装の昔と今

オーストリアのファッション界では民族衣装はとても大切な要素です。民族衣装は社会のまた地域のアイデンティティの担い手なのです。以下にご紹介するのは1900年から1930年頃の、ウィーンを除く8つの州の民族衣装です。(ウィーンは独自の衣装を特に持たない。)また、第一次世界大戦後にイタリア領となった南チロルの写真もご覧下さい。これらの衣装は現在でも田舎で着用されています。



フォアアルベルク州



北チロル



南チロル



東チロル



ザルツブルク州



オーバーエスタライヒ州



ケルンテン州



シュタヤーマルク州



ニーダーエスタライヒ州



ブルゲンラント州



民俗衣装をまとった子供達

民族衣装の要素は、現代のオーストリアデザイナーの作品にも影響を与えています。例えば、オーストリアの世界的に有名なデザイナー、ヘルムート・ラングは、ザルツブルクの老舗企業のゲッスル社（Gössl）とコラボレーションした作品を1990年代に発表しました。このように、実際にオーストリアの民俗衣装産業とモードが協力し、創造的な伝統衣装の提案も行っています。



ゲッスル社とヘルムート・ラングのコラボ作品
（写真提供：ゲッスル社）

ユーロ紙幣・オーストリアで生まれたデザイン

オーストリア人のローベルト・カリナ（Robert Kalina, 1955-）は、1975年グラフィック高等専門学校を卒業すると、1976年オーストリア国立銀行に入行後、1998年にオーストリア紙幣保安印刷社（Österreichische Banknoten und Sicherheitsdruck GmbH）としてアウトソースされる部署で紙幣デザイナーとして従事してきました。それ以来、1982年以降のすべてのシリング紙幣をデザインしてきました。1996年には、ユーロ紙幣のデザインコンペで他の応募者を退けると、世界的に有名になりました。全部で44件あった応募作品の中から、ユーロ紙幣の製造に彼の作品が選ばれたのです。彼の成功の秘密は何だったのでしょうか。カリナは、他のデザイナーとは全く別の道をたどってデザインをしたのです。特定有名人物の肖像画の利用が禁止されたため、多くのデザイナーが理想化した人物像を描いたのに対し、カリナは人物像を捨て、建造物（橋、門、窓）を作品の中心に置きました。彼は、「知らない無名の顔を出しても」あまり意味がないと考え、逆に橋や門、窓を採用して「欧州連合の開放性と協力の精神」を象徴するシンボルに据えました。描かれている建造物、それは7つの時代の文化様式を代表するもので、種々のオリジナルのモデルはあるものの、デザイン的に抽象化することで、どれとは特定できないようになっています。紙幣の受容度については、ギャラップ社



ローベルト・カリナ

（Gallup）が全部で2,000人のEU市民、そのうち半分が紙幣に接する機会が多い銀行員、タクシーの運転手、レジ係など、残りの半分は一般市民で、アンケート調査を行いました。このアンケート調査の結果とマーケティング、広告、デザイン、文化史の各専門家14名の判定によって、最優秀デザインが選出されたのでした。

ユーロ紙幣に描かれたヨーロッパの建築様式の歴史



5ユーロ
古典



10ユーロ
ロマネスク



20ユーロ
ゴシック



50ユーロ
ルネッサンス



100ユーロ
バロック



200ユーロ
アール・ヌーボー
（ユーゲントシュティール）



500ユーロ
近代

グラーツの現代建築（Graz）

クンストハウス・グラーツ（Kunsthau Graz）

クンストハウス・グラーツは、2003年の欧州文化首都年を記念した企画の一環でグラーツに建てられた州立美術館のひとつで、主に現代美術の展示を行っています。

この建築物は、設計をしたピーター・クックらによって「フレンドリー・エイリアン（Friendly Alien）」と名付けられ、グラーツ市民に親しまれています。



設計：ピーター・クック（Peter Cook）、
コリン・ファーニア（Colin Fournier）

ムールインゼル（Murinsel）

ムールインゼルもまた、2003年の欧州文化首都年を記念した企画の一環で建設されました。長さ50m、幅20mの貝型をしたこの建築は、グラーツを流れるムール川に設置されており、カフェや子供の遊び場としての機能もっています。前述のクンストハウス・グラーツと共に、現在はグラーツのランドマークとなっています。



設計：ヴィート・アコンチ（Vito Acconci）

（資料提供：レアネ・ロイニング、オーストリア政府観光局）

映画

“And the Oscar goes to...（そしてオスカー受賞者は...）”78年にわたるアカデミー賞授与の歴史の中で、オーストリアの映画は112回オスカーにノミネートされ、そのうち33回実際に賞を受賞しました。近年の受賞・ノミネート作品を下記にご紹介します。

2002年 短編映画実写部門ノミネート

「コピーショップ（Copyshop）」 監督：ヴィルギル・ヴィードリッヒ（Virgil Widrich）

2006年 ドキュメンタリー部門ノミネート

「ダーウィンの悪夢（Darwin's Nightmare）」
監督：フーベルト・ザウパー（Hubert Sauper）

2008年 最優秀外国映画賞受賞

「ヒトラーの贋札（Der Fälscher）」
監督：シュテファン・ルツォヴィツキ（Stefan Ruzowitzky）

オーストリアが特に得意とする映画ジャンルは、風刺ものです。すでに無声映画の時代から、人気の漫談士が俳優として起用されていました。そこでは、典型的なオーストリア人の悪い特性が描写されました。今日でも、オーストリアで最も入場者数の多いのはコメディ作品であるという統計の結果が出ています。ハラルド・ジヒャリツ（Harald Sicheritz）監督の

「ポピッツ (Poppit, 2003年)」や「ヒンターホルツ (Hinterholz, 1999年)」は、いずれもオーストリア映画大賞を受賞し、国内で62万人を動員しました。オーストリアのコメディが自国外ではほとんど反響を得ないのも目立った特徴です。近年、国際的に最も著名で大きな成功を収めた映画をご紹介します。

2001年「ピアニスト (Die Klavierspielerin)」

監督：ミヒャエル・ハーネケ (Michael Haneke)

エルフリーデ・イエリネク (Elfriede Jelinek) の文学作品の映画化。世界で250万人を動員。

2005年「We Feed the World」

監督：エルヴィン・ヴァーゲンホーファー (Erwin Wagenhofer)

2006年「いのちの食べ方 (Unser Täglich Brot)」

監督：ニコラス・ガイヤーハルター (Nikolaus Geyrhalter)

2008年「Let's Make Money」

監督：エルヴィン・ヴァーゲンホーファー (Erwin Wagenhofer)

2009年「ザ・ホワイト・リボン (The White Ribbon)」 監督：ミヒャエル・ハーネケ (Michael Haneke) カンヌ国際映画祭、パルムドール賞受賞。

中でも食物が人の口に入るまでの過程を描いたドキュメンタリー映画「いのちの食べ方」は、日本でも入場者数記録を塗り替えました。この映画は東京でリリースして3ヶ月半で、4千万円の興業収益を上げています。更にオーストリアの映画史で重要な映画ジャンルとして、アバンギャルド映画があります。戦後始まったこのタイプの映画の伝統は今も引き継がれています。商業主義ではなく、実験的ジャンルとして、映画という媒体をありきたりの伝統から離れて捉え、造形芸術と深く結びつけたものです。このような前衛映画では、“不快感を与える”もしくは“芸術に適さない”ものが頻繁にテーマとして選ばれます。初期のパイオニアとして大きな意味を持ったのは、ペーター・クーベルカ (Peter Kubelka)、クルト・クレン (Kurt Kren)、ヴァリー・エクスポート (Valie Export) などです。オーストリアは、革新的な映画機材の開発でも知られています。たとえば、あの革命的な35mmカメラ、ムービーカムを発明したのは、オーストリアのアートディレクター、フリッツ・ガブリエル・バウアー (Fritz Gabriel Bauer) です。これは、ハリウッドで技術アカデミー賞を3回受賞しました。またBrains&Pictures社の遠隔操作式ケーブルカメラCAMCAT®は、スポーツや文化イベントの中継用に世界で人気が高く、ハリリーポッターの撮影にも使われました。

チロル – アルプスを代表する国際的映画ロケ地

チロル州は、日本ではリゾート地として、特にハイキングなどで人気があります。ところが、今度は映画のロケ隊がチロルのすばらしさを新発見しました。四季折々に姿を変えて様々に楽しませてくれる景観、豊かに残る無垢の自然、そしてロマンチックな山並みは、外国の映画界でも大人気です。標高の高い山々のロケ地へもアクセスが容易で、高い機能性をもつ公共施設が整っており、特に地元民の心温まる歓迎もあいまって、外国からの劇場用映画、テレビ映画、連続シリーズなどのロケ地としてチロルの評判は高まる一方で、ジャンルもアクション物からノスタルジー映画、サスペンス、ドキュメンタリー、ファミリー映画まで多岐に渡っています。こうしたロケーションには、チロル州観光局の下部機関であるシネ・チロルが公的補助を提供しています。